

# 青山教会会報

「神の恵みは無駄にならず」

詩編二二編二二〜三二節

コリントの信徒への手紙一

十五章一〜十一節

牧師 増田将平

今朝は東京マラソンの日です。こちらに来る時に外堀通りを大勢の人々が走っている様子が見えました。私どもは今礼拝堂で座っていますが、私どもも実はランナーなのです。東京マラソンは年一度ですが私どもはいつも走っています。同じゴール、私どもをこのレースに召してください。このレースを走っているのは現代の信仰者だけではありません。最初に主イエスが走り抜いてくださり、弟子たち、私どもに先立って走った多くの信仰の先達がいます。

私が神学生の時にある教授が言いました。

「教会の営みは駅伝のようなものであり、たすきは教会の信仰告白だ」。初代のキリスト者が第一走者です。次の走者、そしてまた次と手渡されているたすきがある。それが「信仰告白」です。礼拝で告白する「使徒信条」がその代表です。たすきは途中で色を変えてはいけません。受け取ったたすきを肩にかけて走り抜き、そのまま次の走者に手渡すのです。

パウロもまた信仰の走者の一人でした。三節前半に「わたしがあなたがたに伝えたいのは、私も受けたもの」とあります。パウロは第二走者でした。パウロに先立って教会に生きたキリスト者たちがたすきを手渡したのです。たすきは受け取って終わりではありません。次の人に手渡すためにあるのです。私どもが今走っているのも手渡すためです。その時に詩編二二編の言葉が実現するのです。「子孫は神に仕え／主のことを来たるべき代に語り伝え／成し遂げてくださった恵みの御業を民の末に告げ知らせるでしょう」

「死者の復活などはない」「霊魂不滅は信じるが身体のみがえりはない」「キリストは復活したのだらう。だがわたしたちは死んだらおしまいだ」「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死

ぬ身ではないか」。コリントにある教会ではこんな言葉が交わされていました。ところが聖書は復活を証明しようとはしません。では、どのようにして復活を知ることができるのでしょうか。

パウロはキリストが「死んだ」「葬られた」と過去形で言います。ところが「復活」は書き方が違うのです。過去に起きたことが今も続いているという書き方です。「冬が来た。だから今も冬だ」という言い方に似ています。キリストは復活された。だから今も生きておられるということです。そして復活のキリストと出会って人生を変えられた人々が大勢いると言います。パウロは復活のキリストと出会った者たちの名前を記します。最初にペトロ、ヤコブ、すべての使徒たち、そして最後にパウロは自分とキリストの出会いを語ります。パウロが最後に登場するのは自分の偉大さを強調するためではありません。「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました」。「月足らず」とは未熟児ということ。最近この言葉を聞くことは少なくなりました。「この子は未熟児で生まれた」と母親が言えば「もしかしたら、この子は今ここにいなかったかもしれない」という

意味でした。この子の命はまさに与えられたものだという思いが込められています。パウロも自らの過去を振り返るとそれと同じだと言います。パウロは以前、教会を迫害していました。それは正しいことで神のために行っているのだと自負していました。これがパウロの罪でした。パウロはもし復活したキリストと出会うことがなかったら、自分は滅んでいたと言うのです。「わたしは使徒たちの中でもいちばん小さな者、使徒と呼ばれる値打ちのない者」と言います。「まさにわれこそは」という言い方をしています。私どもも自分の歩みを振り返ればパウロと同じ思いになるのではないのでしょうか。「わたしは、キリスト者の中でも小さな者であり、キリスト者と呼ばれる値打ちのない者です」

しかしパウロはここで卑屈になっているのでも、開き直っているのでもありません。キリストに救われた恵みの中に立っているからこそ言えることなのです。パウロは自分を救ってくださった神に感謝しているのです。パウロは「神の恵みによって今日のわたしがある」と言いました。私どもが今日あるを得ているのはなぜでしょうか。自分の信仰深さによつてでしょうか。何か優れた点があったからでしょうか。いいえ、ただ神の恵みによつてです、としか言いようがないのではないのでしょうか。

パウロは「滅びに向かつて突っ走っていた自分が救われ、使徒として神に仕えて生きている。この恵みは自分だけの特権ではない。誰でも私のように神に向かつて神に仕えて生きていることができる」と信じていました。「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました」。普通はここで終わります。すると自分のしたことを誇る言葉になります。私どもは時に自分が神様のためにしたことの結果が気になるかもしれません。どれだけ自分が神様のお役に立てているのだろうか。その結果を自分の目で見て一喜一憂します。虚しさが襲うこともあるでしょう。しかしそこでは自分がしたことばかりに目を向けてしまっており、神の恵みが働いていることを忘れているのです。

「しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」

パウロは自分を誇っているのではありません。私ではない、すべては神の恵みによつてです。万感が胸に迫ってくるよ

うな思いでした。パウロはこの「たすき」、信仰告白を「福音」「よい知らせ」と呼びます。「生活のよりどころ」「それによつて立つてきた福音」と言います。この福音の上に立ち、この福音をよりどころとして生きたとき、人は誰でもパウロのように喜んで言えるのです。「働いたのは実は私ではありません。私と共にある神の恵みなのです」。神の恵みは実に力強いものです。私どもを罪と死から救って命で満たし、前進させます。かつて私どもに信仰のたすきを手渡した多くの先達は眠りに就きました。「眠っている」のであって「滅んだ」ではありません。彼らはやがていつの日かキリストによつて目覚めを与えられて復活するのです。私どももまた復活するのです。

今朝、再び信仰のたすきを受け取り直し、神に向かつて走り始めましょう。一人で走るのではなく、仲間たちがいまいます。牛込弘方町教会だけではなく、全国、世界の諸教会があります。やがて私どももこのように言う日が来るでしょう。「私に与えられた神の恵みは無駄になりませんでした」

(二月二十八日牛込弘方町教会礼拝説教要旨)